

人生を 演じ分ける

平田オリザ

hirata oriza

昨年十月に『わかりあえないことから』（講談社現代新書）という本を出版して、この本が私の本ではないのではないかと思うくらいに売れて（と言ってもやはり私の本であるから、たかが知れてはいるのだが）、思いもかけないところから講演の依頼がくるようになった。

例えば、ジョブカフェという若者の就労支援を行う半官半民の組織から、いくつか依頼があった。今はこういった組織が各県にあつて、いずこでも、かつてのような職業訓練とは違うかたちの就労支援の在り方を模索して

いる。ある県に呼ばれて、一くさり講演を終えたあとの懇親会で、私は次のような話をした。

「私の経営するこまばアゴラ劇場では、数年前から、雇用保険受給者の方たちに対して大幅な割引制度を行っています。こういった



制度は、ヨーロッパの多くの公共施設で普通に行われているものですが、日本ではほとんど見ることができません。

いや、日本では、どちらかというところ逆の方向を向いていたのではないのでしょうか。失業者が平日の昼間に芝居を観に来たら『求職活動を怠っている』と言って、雇用保険を打ち切ってしまうような政策をしてきたのではありませんか。おそらく、その政策にも根拠はあったのだと思います。経済が右肩上がりの時代なら、景気の波はあっても、半年も我慢すれば、誰もが必ず再就職ができました。だから、就職できないのは本人の努力が足りないからだとこの言説も、一応社会的なコンセンサスを得られました。しかし、もはや就職ができないのは本人の努力だけの問題ではないというの、社会的通念になりつつあります。それよりも、そういった失職した方々を、どのように社会に近づけていくかが、重要な課題となってきました。ですから、私の住んでいる文化・芸術の世界と、皆さんが行っている就労支援の世界は、『社会包摂』という言葉でつながっています。」

社会包摂（あるいは社会的包摂）とは、地縁血縁型社会の崩壊や、経済のグローバル化や長引く不況によって孤立しがちな個人を、どうにかして社会に近づけておく方策全般を指す。そして、この社会包摂においては、

文化、芸術の役割は大きい。なぜならここでは、地縁血縁型の共同体と、経済優先の利益共同体の他にもう一つ、もう少し出入り自由な「関心共同体」とでも呼ぶべき新しい共同体が求められるからだ。

● 前記した『わかりあえないことから』でも繰り返し書いてきたことだが、昨今の就職戦線で、「コミュニケーション能力」がいささかヒステリックなほどに叫ばれる状況は、本当にいかなものかと思っている。

私は、話し言葉を扱う劇作家という職業で糊口を凌いでいるので、言葉の変化には敏感に、そしてできるだけ寛容でありたいと思っている。特に若い人たちが使う新しい言葉については、そこに時代の動き、感性の発露を見いだして感心させられることが多い。

ただ、そんな私でも、一つだけ、どうしても受け入れられない昨今の若者言葉がある。「コミュニケーション障害」あるいはそれを縮めて「コミュ障」というやつだ。私は大学の授業で、「できれば、この言葉だけは使わないでほしい」と学生たちにお願ひする。

例えば、百メートルを走るのが多少遅いからといって、「いや、オレ、走力障害だからさ」とは言わないだろう。それが、障害をもった方々に対して、とても失礼な言葉遣いだということも、大学生ともなれば十分理解で

きるだろう。ところが、コミュニケーションに関して「コミュニケーション障害」「コミュ障」という言葉が、当たり前のように流布している。これはおかしなことではないか。この原稿を書いているのは二〇一三年の夏で、世界陸上の真っ最中である。日本人選手が百メートル走で初めて十秒を切るかどうか話題となっている。それは確かにすばらしいことだが、しかし、この拙文を読んでいる読者諸氏の大半も、百メートルを二十秒、あるいは三十秒でなら走ることができるよう。まさに、身体に障害をもっていない限り、皆その程度の能力はもっている。そして、社会は、百メートルを二十秒、三十秒で走ること前提にして組み立てられている。

● もしも、百メートルを十二秒以内で走れないと就職できなくなったら、人々はその理不尽に抗う声を上げるだろう。だが、世の中は、そういう仕組みにはなっていない、だいたい標準か、それより少し下くらいの能力を基準にして社会というのは組み立てられているし、そうあらねばならない。そうあらねばならないはずなのに、それが、「高度のコミュニケーション能力」をもたなければ就職できないというような、ある種の幻想が流布しているというのが、現在の日本社会が抱える最大の問題点だと私は考えている。

もう一点、『わかりあえないことから』を上梓してから、多くの方に「気が楽になった」と言われるのは、本書のなかにある「ダブルバインド」の記述についてだった。

ダブルバインドとは心理学の用語で、異なるコマンドを与え続けられる状態を言う。簡単な例を挙げるなら、お母さんが子どもを連れて散歩に出て近所の人と出会い、「いや、もううちの子は勉強はできないんですけど、まあ子どもは身体が丈夫ならね」と言いながら、家に帰った途端に「何、この成績、恥ずかしいわね。早く勉強しなさい」と怒鳴る。子どもにしてみれば、「さつきは身体が丈夫ならいいって言ったじゃないか」と思うだろう。いや、これは大人の側からすれば、ウチとソトとの使い分けなので仕方ない部分があるのだが、子どもにはその区別はなかなかつかない。そして、これが強く繰り返されると、これも心理学用語で言うところの「操られ感」「自己喪失感」が起り、やがて人格障害や引きこもりの原因になるのではないかと言われている。

今、日本企業は、「コミュニケーション能力、コミュニケーション能力」とヒステリックなほどに言う。そこでいうコミュニケーション能力とは一般に、グローバルコミュニケーションスキルを指す。異なる文化、異なる価値観をもった人間と、コンテキストを摺り合わ

せ、合意形成を行っていく能力である。たいへんすばらしいことだ。私も大学人であるから、このような能力をもった学生を、一人でも多く社会に送り出したいと願っている。

しかし、多くの新入社員は、入社して一週間も経たないうちに、もう一つ別のコミュニケーション能力を企業から要求される。それは、いわゆる「日本型」のコミュニケーション能力だ。

「上司の気持ちを察して動け」

「会議の空気を読んで、意見を言うな」

これは、あきらかに、異なるコマンドを要求されている。

家庭内でも、ダブルバインドが厳しければ、引きこもりが起るのだ。今、日本では、国全体がダブルバインドの状態にある。

皆さんも、PCに次々とコマンドを打ち込んで、フリーズさせてしまった経験があるだろう。コンピュータは人間の脳に似せて作られている。人間も、異なるコマンドを矢継ぎ早に入力されれば、自分を保つことができずにフリーズせざるをえないのだ。

ただ、私は、このダブルバインド状態を、「だからダメだ」と言っているわけではない。私はこの状態を、現代の日本人が受け入れざるをえない一つの苦役のようなものだと考えている。この極東の島国が、国際社会で生き抜いていくためには、どうしても、このダブル

ルバインド状態を引き受けざるをえない。私たちは、明日から国民全員が英語を使い、出会う頭に熱い抱擁をしてキスし合うように、自らのコミュニケーションの文化を突然に変えることはできない。しかし、だからと言って、鎖国をして、他国、他民族との接触を一切断つことも難しい。だとすれば、このダブルバインド状態を、しっかりと受け止めて、「では、どうするか」ということを考えていくべきなのではあるまいか。

百年前ならば、夏目漱石や森鷗外といった超エリートだけが、このダブルバインド状態に悩み苦しめば済んだ。あの天才夏目漱石がロンドンでノイローゼとなり、あの秀才森鷗外が「かのように生きる」と覚悟を決めて二重生活を送ったのだ。しかし、今の日本の若者たちは、自分たちが何に苦しめられているのかもわからずに、当然のようにダブルバインド状態のなかに置かれている。より始末が悪いのは企業や教育界のほうだ。グローバル、グローバルと叫びながら、実際の職場や教室では、同調圧力の強い日本型のコミュニケーションを求め続ける。それもほとんど無意識に。

そして、もつとも悲惨なのは、現在の文部科学省の在り方だ。昨今、新政権の移行を受けてか、文科省が大学に要求してくる教育内容は、「グローバル」の一辺倒である。グロ

ーバルに活躍できる人材を育成しようと、高度な要求が次々に押しつけられている。これはもう、「グローバル」の同調圧力だ。そこには、「国際化」のもつ重要な要素である「多様性」は影もかたちもないのである。

私は、このダブルバインド状態を切り抜ける一つの方策として、「演じ分ける能力」を身につけることを提唱してきた。

不登校になる子どもたちは、「いい子を演じるのに疲れた」と言い、「本当の自分はこんなじゃない」と言う。しかし、本当の自分なんてあるのだろうか。私たちは、家庭や会社で、さまざまな仮面をかぶって生きている。大人は、そんなことは重々承知しているはずなのに、子どもたちには、「本当の自分を見つけれ」と言う。

人間はタマネギのようなものである。タマネギは、どこからが皮で、どこからがタマネギ本体ということはない。皮の総体がタマネギである。人間も同様で、私たちはさまざまな仮面をかぶり、その仮面の総体が人格を形成している。ただし、おそらく、一つの仮面だけが重すぎると、身体が傾き、精神状態が歪んでくる。今の子どもたちに関して言えば、おそらく、少し学校での仮面が重すぎるのだろう。これがいわゆる「キャラ疲れ」の原因となり、疲れが高すると不登校となる。

さて、昨今の就職活動では、大学生はみな「自己分析シート」を使って、ここでも「本当の自分」を見つけようとする。いや、見つけることが強要される。本当の自分が見つければ、自分に合った仕事が見つかるという理屈だ。そんなバカなことはあるまい。私は学生たちに、「本当の自分なんてないんだから、自分に合った仕事だつてないのだ」と言うことにしている。

実際、せっかく就職をしながら離職してしまふ若者たちの多くが、「自分に合った仕事ではなかった」と言う。「本当の自分はこんなじゃない」と、どこか似た言い回しだ。自分に合った仕事などない。少しずつ時間をかけて、自分が、仕事に合わせていくのだ。ただし、忘れてはいけないのは、会社の側も変わっていくという点だ。おそらく、そのことが見えにくい世の中になっているのだと思う。一新社員にとつて、企業は巨大な存在だ。自分一人が入ったところで、何かが変わるわけがないと思いがちになる。しかし、考えてみてほしい。どんなに大きな企業でも、配属される部署の最小単位は、十数人、多くても二十人といったところだろう。そこに一人の若者が入っていく。生物で言えば、細胞の五パーセントなり十パーセントなりが、ごそつと入れ替わるのだ。これは生命体にとつては大きな変化である。

今、就職活動をしている若者たちは、物心ついたときには、日本は完全に停滞のただなかにあった世代である。変革を信じることに、実感することは難しいかもしれない。しかし、人間は変わる。組織も変わる。社会も変わる。その変わりゆく社会に応じて、私たちはまた役割を演じ分けていく。人が組織に合わせて仮面をかぶるように、組織もまた、人によって変わるのだ。

日本では残念ながら、「演じる」という言葉には、自分を偽る、嘘をつくといったマイナスのイメージがつきまとう。「変わる」こともまた、変節といったイメージがある。しかし、私たちは、演じる生き物なのだ。さまざまな環境に応じて演じ分ける生き物なのだ。「いい子を演じるのに疲れた」と言う子どもたちに、「もう演じなくていいよ、本当の自分を見つけない」と言うのは大人の欺瞞きぼんにすぎない。そうではなく、いい子を演じることに疲れない子どもを作りたい。できることならば、いい子を演じるのを楽しむくらいにしたたかな子どもを作りたい。それが教育の役割だと、私は信じる。そして、そのしたたかさのみが、日本人がダブルバインドを乗り越えていく方策だとも信じている。

（ひらた おりぎ・劇作家・大阪大学コミュニケーションセンター教授）
ザイン・センター教授

著書に「わかりあえないことから」講談社現代新書